国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

うしに惹かれて みんぱくめぐり

“うし”と人が、どのような関係を築いてきたのか、各国・地域の資料をとおして見てみましょう。

「うしに惹かれて みんぱくめぐり」はことわざの「牛に引かれて善光寺参り」をもとにしています。このことわざには思いがけないことが縁で偶然良い方向へ導かれる、という意味があります。干支の“うし”をきっかけに、みんぱくで世界各地の文化に出会い、興味を持っていただけたらうれしいです。

H0000000：標本番号

ビデオテーク
世界のさまざまな地域でくらす人びとの生活などを映像で紹介しています。

探究ひろば
展示している資料に関連した本を読むことができます。

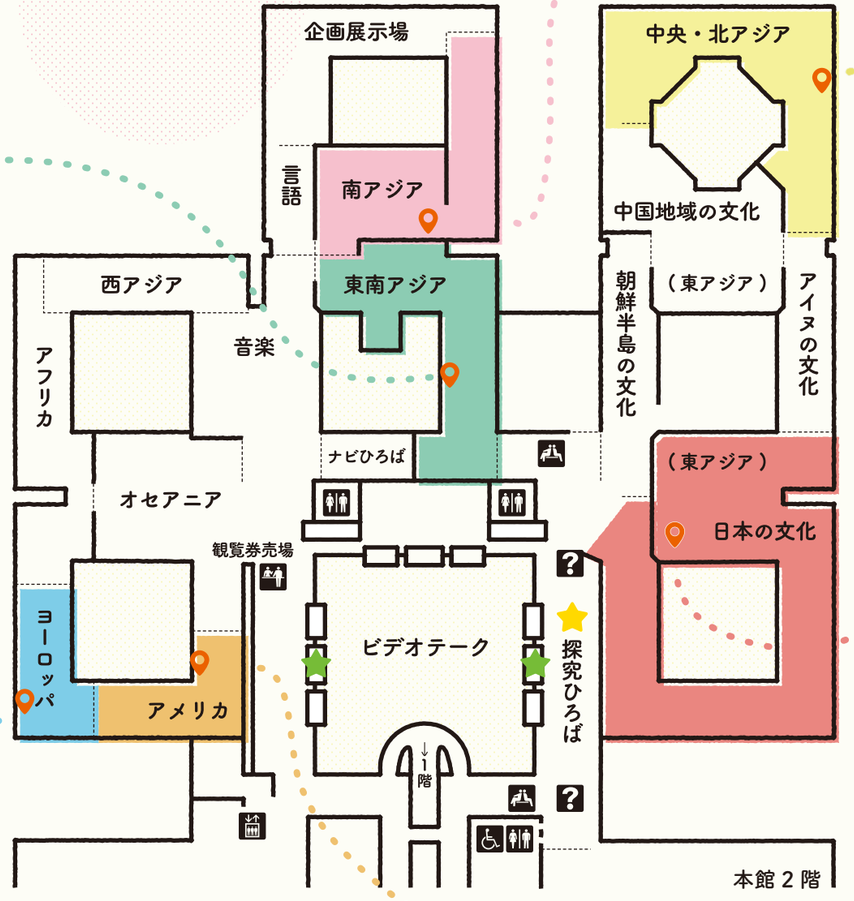
東南アジア　**スイギュウと農民／ベトナム**　H0201550

これは、ベトナムの水上人形芝居ムアゾイ・ヌオックに用いられる人形です。スイギュウに犂を引かせ田を起こす様子を表しています。水上人形芝居では、池の中に舞台をつくり、人形を長い棒の先に取り付けて水の中であやつります。稲作のサイクルにあわせ、豊作をねがう祭りなどで上演されてきました。

南アジア　**ウシ用額飾り／インド**　H0238303 他

ウシにこのような装飾をする理由は、南アジアの生業と信仰とが関係しています。南アジアでは、農業と牧畜がセットになった有畜農業が特徴です。力が強い雄ウシは、犂を引いて田畑を耕すときに大変重宝します。また、ヒンドゥー教で神聖とされる雌ウシは、乳とその加工品、糞や尿に浄化作用や豊穣がもたらされるとされ、祭りや儀礼の際に重要な役割を担っています。ウシへの装飾は、このような人びととウシとの生業や信仰によるつながりをうかがうことができます。

うしもオシャレをする？



中央・北アジア　**儀礼用仮面／モンゴル**　H0090115

モンゴルでは、ウシはウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダと並んで遊牧民が飼う主要な家畜のひとつです。ウシの乳からはチーズやヨーグルト、乳酒といった乳製品をつくります。ただしこの仮面は家畜ではなく神様です。チベットやモンゴルの仏教で催されるチャムという仮面舞儀礼で使われるものです。この仮面は、ダムディンチョイジル（金剛畏怖）といいますが、日本でいう閻魔大王に相当します。

日本の文化　**牛鬼／日本・愛媛県**　H0037658 他

この牛鬼は、愛媛県に伝えられてきたもので、愛媛県の南部、南予のお祭りでは欠かせない存在です。ウシとも鬼ともつかない怖い顔、長い首、やたら大きな胴体は、今一つよくわからない謎の巨大怪獣といったところでしょうか。お祭りでは、お御輿の先導をつとめ、悪魔祓いをしながら地区の家々をまわります。

うし？おに？いったい何者？

どうぶつがたくさん、何の行列かな？

ヨーロッパ　**アルプ行列の人形／スイス連邦**　H0092228 他

ウシのミルクから、チーズがつくられます。スイスのアッペンツェル地方は、そのチーズつくりで有名です。6月から9月にかけて、村のウシをアルプと呼ばれる高地で放牧し、牧童がアルプでチーズをつくります。アルプ行列というのは、何十頭ものウシと牧童が、夏に村を出発し、秋に村に帰る日の移動行列のことです。牧童は赤いチョッキでおめかしし、ウシは頭に花冠、首にりっぱなカウベルをさげて、長い道のりを歩きます。

アメリカ　**ウシの仮面／メキシコ**　H0126922

メキシコの先住民族の間には、動物の仮面をかぶって踊る習慣がありました。16世紀にスペイン人がキリスト教を伝えると、多くの人びとがその信仰を受け入れました。同時に家畜としてウシも導入され、農作業に使われるようになりました。その結果、キリスト教のお祭りの際に、ウシの仮面を用いた踊りがおこなわれるようになりました。